

平成30年度第1回南国市総合教育会議 議事録

9:30	事務局 (企画課長)	定刻となりましたので、ただいまより、第1回南国市総合教育会議を開会いたします。それでは、平山市長よろしくお願ひいたします。
開会の挨拶	市長	本日はお忙しい中、南国市総合教育会議にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。今回は会議次第にもありますとおり、平成30年度の教育委員会の取り組みにつきまして、意見交換をさせていただきたいと思ひます。 また、今回より北村委員に替わり、中村晋策委員が出席されております。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。
協議 9:35	市長	それでは、議事に入らせていただきます。 まず始めに「平成30年度の教育委員会の取り組み」について、皆様方からご提案をいただき協議したいと思ひます。よろしくお願ひいたします。
	教育長	【資料（南国市教育振興基本計画）を基に説明】
	市長	ご提案ありがとうございます。教育委員の皆様から補足等ございませんでしょうか。小中学校英語担当教諭の指導力向上のための研修拠点校事業というのは香南中ブロックだけでなく他の中学校を指導して廻る、先生の教え方を指導して廻るといふことですか。
	教育長	県教委が34市町村へ1名そういう人を配置して、教育委員会がその人を活用して自分の市町村の小中学校の英語力向上に努めなさい、といふことです。
	市長	そしたら授業の様子を見て、こういう風な指導方法がいいのではないかと、いふようなアドバイスをいただける様な指導力のある先生がいればといふ感じですか。
	教育長	そうです。それに教育委員会も一緒に行ったり、委員会が英語力向上に一緒にやりなさい、といふ趣旨です。
	市長	中学校にどれ位の英語力が必要とされていて、現在どこまでのレベルであるのか分かりませんが、お話ができるレベルまで引き上げるといふ事が中学校での到達点といふ事にされているのでしょうか。
	教育長	具体的なものはありませんが、先生方は英検2級を受験するなど、教員に対しては一定のものがきています。子ども達の英語力を上げるといふのが今必須で、何より英語嫌いのアレルギーの子を作らないといふのが絶対条件です。小学校でつまずかしたら中学校高校大学へ行ったら拒絶しますので、それを1番心配している所です。
	市長	小学校ではまだ英語教育はなされてないですね。

教育長	平成32年度から英語科になってきます。今年来年はその移行期間ですので外国語活動から英語科への持って行き方が1番大事です。英語嫌いの子を作らないように心配している所です。
市長	何かご意見ありませんか。それでは次へ進めます。
教育長	【資料（6つの提言にかかる取り組み、児童生徒版リーフレット案等）を基に説明】
市長	このモヤモヤのアンケートは今後どのように活用されるのでしょうか。
教育長	まだそこまでいっておりません。7月に神沢先生のご意見ご指導を頂いて、7月中に原案を作り上げて公聴会にも提示して、今年度中以降に作り上げていきたいと、できたら第2回総合教育会議にできたものを提案させて頂けたらと考えています。教育委員会として子ども向けのパンフレットを作らないといけませんので、その前段階では教育委員会の先生方にも教育委員の方々にもご意見を頂いて、その後、総合教育会議で意見を頂きたいと考えています。
市長	Q-Uアンケートとか非常に大切な部分であると思いますが、アンケートの記入する環境といいますか、どんな風にアンケートを書いていますでしょうか。記名式ですよね。記名式で書くアンケートは、人に見られるので嫌ですよね。その辺りが配慮されているのか書きやすい環境にあるのか気になります。いかがでしょうか。
教育委員会事務局	アンケートを実施するにあたって担任が外れます。それで担任に対して言いやすい環境を作るとというのが1つの大きなアンケートを実施する際の配慮であると思います。書いたアンケートは担任ではない者が受け取って集計をしますが、集計も担任ではなく別の者がやるという事でお互いに教員間もフィルターをかけています。
市長	やはり皆、机で書くわけですよ。書きづらい環境がないかなと思っただけです。
教育委員会事務局	そういう配慮をしている学校もあれば担任がやっている学校もあります。書く際に自分の本音を書けるように配慮していきたいと思います。特に配慮が必要なのは書いた事によって何か先生に詰められるような感じがあるのでは、なかなか本音が書けません。それをどういう風に子どもにアプローチをしていくのかというのは慎重に考えなくてははいけません。本当の事を書いてくれたのにそれで大事になってしまうと書いてくれなくなる、という事もあります。そういった配慮も含めて組織的に対応していくという事で、委員会も要支援群のお子さんへの対応の仕方を把握した上で対応していきたいと思います。
市長	ゲートキーパー養成研修も年2回ぐらいですよ。その養成された先生が各学校へ行ってPTAとかに行うわけですか。
教育長	そうです。まず教職員に行って、今日はまだ詳しく話しておりませんが、文科省か

	<p>ら出ているガイドラインでは、1点目として、自殺予防学習をやる前に学校における合意形成をきちんとする事、もう1点は保護者やPTAとの合意形成、3つ目には地域の関係機関との合意形成。そこまで文科省のガイドラインは謳っています。そこまできちんと準備してからでないと予防学習はやってもいきません、逆に危険を伴いますという事を書いています。指導もいただきながら慌てずにきちんとやっていかないと上滑りだけではいきませんし、また子ども達に予防学習をやっていく事になりますので余程慎重に準備をしてやらないといけません。スクールカウンセラーとかソーシャルワーカー等いろんな方の力を頂きながら取り組まないといけません。慌てずにじっくり取り組んでいきたいと考えています。</p>
市長	<p>子どもの自尊感情、自己肯定感を高めるというのはどうすれば良いのか考えます。これがなかなか難しいのではないのかと率直に思います。どうしたらモチベーションを高くできるのか。</p>
教育委員	<p>色々な学習の場でも生活の場でも自分に位置がある、役割があるという学級づくりといいですか、この仕事は自分がやらないといけないという事を生活の中で知ることだと思います。お前が頼りやと、そんな風な学級づくりがだんだん学校に広がり全体に集団意識になるのではないのでしょうか。</p>
市長	<p>クラスの中で自分の役割というような存在が認められているという感情づくりですね。そういう連携したクラスの雰囲気全体でつくるという事でしょうか。</p>
教育長	<p>やはり自分の存在が認められる、自分で確認できる、それが一番大事ではないかと思います。</p>
市長	<p>それを教師の指導でやっていくというのは難しいですね。徐々にでないと。なかなか自然にそういう雰囲気につくりにもっていくというのは。</p>
教育委員	<p>今は、放課後遊んだり協力してなんとかするという事も少なくなり、非常に難しい環境にあると思います。</p>
市長	<p>どんどんそういった環境、難しい社会になっているというところですね。バーチャルの世界に一人で入っていくという事になると、周りの中の存在というか自分一人で生きていくというような環境になります。それもまた困った社会に進んでしましますが、それにどうしてもはまる子どもが出てくるとは思いますが。</p>
教育委員	<p>だから学校の子どもを集めて集団をつくるという意義が非常に強くなってきています。学校がそういったところに力を入れていくと、これからの社会を生き抜くためには一人では生きられないんだっていう、そういう関係を作っていくといけません。</p>
教育長	<p>昔は教育と言えば自立という事が主でしたけども、それに今は共生、一緒に生きるという事を合わせてやらないと子ども達の人間関係ができていきません。自立と共</p>

	<p>生、この二つをきちんと教育で設定していかないと、子ども達が自分事だけに入ってしまう。</p>
市長	<p>そこまで学校が担わないといけなくなると、ますます学校の役割が重要になり、先生の責任がますます重くなってきます。</p>
教育長	<p>家庭も子どもも少ないですし、学校から帰ってから昔やっていた様な築かれていたものがないですから。いわゆる学校が色々な部活動や学級活動など、そういう場で共生という事を体験させてあげなければなりません。</p>
市長	<p>学校しかなくなりますよね。家に帰ってバーチャルリアリティでは、どこにも触れ合う機会がなくなりますのでね。</p>
教育長	<p>そんな難しい時代になりました。</p>
教育長・教育委員会事務局	<p>【資料（南国市教職員衛生員会について・教員の働き方改革推進事業計画等）を基に説明】</p>
教育委員	<p>研究所に勤めている間に幼保支援課が子育て支援課に変わりました。この4月から幼稚園教育要領や保育士支援など新しい運用が始まりました。ずっと気になっていたのが就学前の独自の保育内容や教育内容の良い所を、後ろにある小中連携に繋げていけるのかという事です。最近ある資料で、4歳児の数学知識が15歳段階での数学知識の到達を予測するという研究を見ました。更に2006年か2007年には5歳児の数量知識が小学校の算数の到達度を予測するという研究が、アメリカ、カナダ、イギリスの3つの研究を統括する形で発表されています。今、学校現場、事務局もそうですけど学力がどうかと毎年平均点で騒いでいる現状は変わっていないかと思いますが、それが南国市が今までやってきた保幼小連携の内実は現実にならぬのかという事と密接につながっているのではないかという事です。その資料には、日本の保育幼稚園現場では意図的に体系的に数学的な事は教えておらず、保育士と子ども達との関わりの中に算数的な事が含まれているとあり、それが実に小学校に上がったからの算数の学力形成に有用な事が研究で明らかになったと書かれています。そうすると幼保支援課を教育委員会から外して、別途、子育て支援課という二つの体制を作った事により、新しく指導要領や保育指針が実行される今年南国市としては困難な状況にあると思います。すぐに組織を改めることは無理だと思いますが、子育て支援課が管轄している部署において、どのような保育が新しい指針に基づいてなされているのか、きちんと把握する体制を作るとか、それと教育委員会と事務局とをリンクさせながら小中学校の教育に繋げていくといった事が検討される事があってもいいのではないかと思います。</p>
市長	<p>これから考えていかねばならない事です。それをどういう風に進めていくかをまた考えさせていただかないといけません。特に4歳5歳のどういった数学に触れ合うのかという環境、保育の中でそういった選択をどのように教えるというか、自然に</p>

		<p>考えるという場を作るという事ですね。</p>
教育委員		<p>そういう事を意識しながら保育教育をしている所では高まっていると思いますが、行事に追われて行事の事ばかりやっているような、あるいは古い保育教育みたいな事を延々と続けている所があれば、そういう所は高まっていないのではないかと思います。</p>
市長		<p>保幼小の中で保育士も色々研修も行っているのですが、そこでは連携の教育の代表の先生などを呼び、保育する環境の中でどのように子どもが考える力を養っていくとか、そういう話は研修の中で学んでいます。こういった取り組みをしている子ども、していない園という形でその差を分析して、こうあるべきではないかというような勉強は保育士はしています。それが数学に置き換えたような環境づくりになるのかな、とイメージを持っていますけれども。そういった事が必要と、今後検討されて必要があれば、それを組み込んだ保育内容を保育の方で考えていく必要もあるかと思います。4歳5歳の研究成果を実践に移すという事が指導要領や保育指針であるのであれば、そういった形に取り入れていかないといけないのではないかと思います。</p>
教育委員		<p>保育指針にそういった事が書かれているのではなくて保育指針と幼稚園要領は共有化するという事で、それを小学校に繋げるといふ風で書かれている様ですけども、それとは別にそういう研究結果があると出ています。小学校中学校で間もなく学力テストが実施されますが、そこで、また何らかの数字が示されて、高いか低いかという事が問題視されていくと思います。</p>
市長		<p>それは保幼小連携の中で、子育て支援課と教育委員会と一緒に同じ土俵で議論すべきことではないのかと思います。それぞれではなく、そういう場を作る事が必要ではないかと思います。</p>
教育長		<p>所属長会をやっていますので、その時に話す機会を持って、そういった内容もご紹介頂いたらと思います。</p>
市長		<p>ほかに何かございませんでしょうか。なければ、「平成30年度の教育委員会の取り組み」の議事は終了させていただきます。</p>
市長		<p>それでは、(2)その他に入らせていただきます。 その他では、1件、今年度の日程につきまして、事務局より報告があります。</p>
事務局		<p>それでは、平成30年度南国市総合教育会議開催予定等一覧表をご覧ください。平成30年度は、本日の会議を含め3回、会議開催を予定しております。第2回は10月16日(火)、第3回は2月22日(金)を予定しています。 その他、協議する必要がある事案が生じた場合、臨時的に開催されることがありますので、よろしくお願いたします。</p>

10:35	市長	本年度の開催予定につきましてご意見等はございませんでしょうか。
	教育委員	異議なし。
	市長	予定していました議案は、以上で終わりましたが、その他で何かございませんでしょうか。
	教育委員	特になし。
	市長	なければ、以上をもちまして、第1回南国市総合教育会議終了をさせていただきます。ご協力、ありがとうございました。